

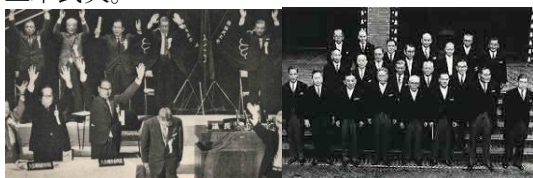
甲状腺外科草子 134

哲人宰相：大平正芳余話⑥

杉野 圭三

冬の時代（前）

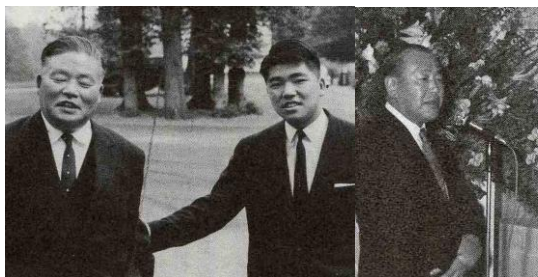
大平は池田勇人に対して遠慮なく諫言を行い、二人の間には徐々に溝が広がってきた。大平は「池田が怒っても少しも怖くない」と周囲に言っていたが、池田は総理三選に慎重な大平が気に入らず、1964年（昭和39）の第三次池田内閣では大平を外相から副幹事長に格下げした。外相は椎名悦三郎、幹事長は三木武夫。



第三次池田内閣（1963年総選挙）

「池田は私（大平）が官房長官の時までは、非常に信用して何でも相談してくれたんです。しかし、今は私に嫉妬している。私が外務大臣になったから次の総理候補として私に人気が移る。池田はそれを感じて非常に私を警戒しているんです。あなた方は池田・大平は一心同体と思われるでしょうが、全く違う。私が言うのも変ですが、政治家の心理とは恐ろしいものですよ」（渡邊恒雄回想録）

この年は大平にとって最悪の年となった。将来を嘱望された長男正樹はベーチェット病で闘病中だったが、病勢は好転せず高熱が続き8月6日、「旅に出るから靴の用意をしろ」という言葉を最後に絶命した。



大平正芳と正樹

正樹没後20年式典の田中角栄

大平の悲嘆は大きく、「凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた」と述べている。

激務の大平の代わりに闘病中の正樹をししば高価なメロンを持参して見舞いに訪れたのは盟友田中角栄で、葬儀のすべての手配も角栄自身がおこなった。角栄は正樹の没後20

年の式典で挨拶を行ったが滂沱の涙となったという。角栄自身も長男正法を5歳で失っており悲しみをわが身の如く感じたのであろう。

池田総理は東京オリンピック後に喉頭がんと診断され、がんセンターに入院した。

「これはえらいことになったというのが、私ども側近の偽らない感懐であった。そして、その瞬間、われわれはお互いに言葉には出さなかったけれども、政権の閉幕という大きな課題を意識していたのである（春風秋雨）」

政権発足時に「朝に組閣して、夕べに倒れてもかまわない、長期政権の野望は禁物である」と誓った池田総理に大平が説得すると何のこだわりもなく素直に応諾されたという。



がんセンター退院（1964年12月）自慢の庭 池田勇人書

がんセンターに入院した池田を大平は毎日訪ね、2-3時間相手をするのを日課とし、疎遠だった関係も修復された。

大平は池田総理を「もともと非凡な英才ではなかった。機略縦横の政略家でもなかった。いわば愛嬌に乏しい無骨な人であった。しかしよく勉強する人でもあった。また善かれ悪しかれ自分の信念で真直ぐにぶつかってゆく人であった」と評している。

また、大平はよく「人間には必ずいいところもあれば欠点もある。正直なところもあればずるいところもある。その人間がぶつかりあって社会を作っているから人間社会は面白いんだ」と語っていた。

池田後の総裁候補として、宏池会内部では河野一郎や藤山愛一郎を擁立する動きもあったが、大平は田中角栄と共同行動をとり吉田茂直系の佐藤栄作を推した。

池田は11月9日、がんセンターの病室で「佐藤栄作君を後継総裁に指名する」と墨書した。大平が「11月9日は貴方にとっても私にとっても生涯における最良の日ですね」と述べ「池田さんは黙してうなずかれた」。

参考資料：一億人の昭和史8、祖父大平正芳（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年4月18日